

幼児期・児童期初期における自己知覚の発達と精神的健康との関連

(中間報告)

清泉女学院大学 眞榮城 和 美

The relation between developments of self-perception for young children and mental-health.

Seisen Jogakuin college MAESHIRO, Kazumi

要 約

本研究は、幼児期・児童期初期における自己知覚の発達と精神的健康との関連について明らかにすることを目的としている。具体的な目的は次の2点である。①子どもの自己知覚尺度として、Harter&Pike (1984)の尺度に準拠した「自己有能感と社会的受容感測定尺度」を作成し、信頼性と妥当性について検討する。②幼児期・児童期初期の自己知覚と精神的健康との関連について検討する。対象者は3歳-6歳までの幼児93名と、6歳-8歳までの児童、保護者と担当教員である。幼児期にある子どもの自己知覚と精神的健康との関連について検討を行った結果、幼稚園教諭評定に基づく“子どもたちの精神的健康度”が低い群は、精神的健康度の高い群よりも、社会的受容感得点が低いことが認められた。今後は、児童期初期における自己知覚データを集積し、尺度の信頼性と妥当性の検討を行うとともに、精神的健康との関係を発達の捉えていく予定である。

【キー・ワード】 幼児期, 児童期, 自己有能感, 社会的受容感, 精神的健康

Abstract

The present study has two aims. Firstly, it conducts to develop a measure of perceived competence and social acceptance (Harter&Pike, 1984) among Japanese children from preschool to second year of elementary school. Secondly, it is to examine the relation between children's self-perception and mental health.

Subjects are 93 preschoolers and first and second grade school children who participated in this interview study. Mental health questionnaire are answered children's parents and teachers. As a result, preschooler's social acceptances that have low mental health score by teachers are lower than high mental health score children. In the future, this study is continued to examine between second grade school children's self perception and mental health.

【Key words】 Young Children, Perceived Competence, Social Acceptance, Mental-health

目 的

1980 年代以降、自己に関する研究領域では自己概念や自尊感情を一次元的な視点のみならず、多次的で多側面的視点に基づいて捉えることが一般的となっており、特に青年期を中心として、自己を多側面的に測定する尺度も数多く作成されている。また、幼児期および児童期初期における「知的能力面」「運動能力面」に関する「自己有能感」や「仲間からの受容」「母親からの受容」といった「社会的受容感」が測定可能な尺度である The Pictorial Scale of Perceived Competence and Social Acceptance for Young Children も開発されている (Harter&Pike, 1984)。この尺度は、幼い調査対象児の興味関心を持続させるために、単なる面接調査ではなく絵を用いて調査を実施している点特徴的であり、子どもが抱く自己有能感や社会的受容感を捉えることが可能なことから、子どもの自己感の発達に関心を持つ多くの研究者により用いられている (例えば, Jambunathan, 2000; Mantzicopoulos, 2006)。

本邦においても桜井・杉原 (1985) が Harter&Pike (1984) の尺度に準拠した「幼児の有能感と社会的受容感測定尺度」を作成し、高い信頼性を確認している。しかしながら、桜井・杉原 (1985) の尺度には Harter&Pike (1984) により作成されている項目とは異なる設問項目が含まれていることや、調査対象者が幼稚園年長児のみであるため調査対象者の幅を広げる必要があること、調査の妥当性について検討がなされていない点などが指摘されていることから、国際比較が可能な幼児版および児童期初期の自己有能感と社会的受容感尺度の構造確認が求められているものと考えられる。そこで本研究では、Harter & Pike (1984) に基づく日本語版尺度の構造を確認し、幼児期と児童期初期における自己知覚と精神的健康との関連について検討することを目的とした。なお、本論文で用いる尺度は Harter の許可を得て使用している。

方 法

調査対象者および調査時期 幼児版では N 県に住む幼稚園児 93 名 (男児 39 名, 女児 54 名, 平均月齢 52.84 ヶ月, SD=11.48) とその保護者 (平均年齢 36.25 歳, SD=3.98) を対象とした。児童期初期版では N 県に住む小学校 1・2 年生 54 名 (男子 28 名, 女子 28 名, 平均年齢 7.13 歳, SD=0.68) とその保護者 (平均年齢 37.6 歳, SD=3.89) を対象とした。幼稚園教諭・教師による幼児・児童の評定は、女性幼稚園教諭 6 名 (平均年齢 29.33 歳, SD=7.02), 小学校教諭男女 9 名の協力を得て行っている。児童期初期版については現在調査進行中である。幼児・児童に対する調査方法は面接調査であり、調査時期は 2009 年 4 月から 2010 年 3 月までを予定している。調査時には倫理面に配慮し、事前に幼稚園および小学校で配布した質問紙に対して保護者からの回答と面接調査への同意が得られた対象児のみに面接調査を実施している。

調査内容 自己知覚に関する調査内容 : 幼児版 The Pictorial scale of perceived competence and social acceptance for preschooler and kindergartener (Harter&Pike, 1984) ・ 児童期初期版 The

Pictorial scale of perceived competence and social acceptance for first and second graders

(Harter&Pike,1984)を日本語に翻訳し使用した。翻訳に関しては日本語を母国語とし英語圏にて心理学の博士号を取得した者にバックトランスレーションを依頼した。設問項目は幼児版・児童期初期版ともに「知的能力」「運動能力」の自己有能感に関する2つの下位尺度と「友人からの受容」「母親からの受容」の社会的受容に関する2つの下位尺度の計4尺度から構成されている。本尺度の特徴として次の3点が挙げられる。①対象児が興味を持続しやすいように絵を用いている。②就学前と就学後では有能感に影響を及ぼす要因が異なることを配慮し、幼児版と児童期初期版の2版に分けられている。③絵を見たときに対象児が主人公に同一化しやすいように、主人公の性別のみが異なる男児版と女児版が作成されている。回答方法は、2段階4件法（第1段階目では2種類の絵の内、自分に似ていると思われる絵を1つ選択、第2段階目では絵が自分に似ている程度を“よく似ている”または“少し似ている”の内から1つ選択する方式）であり、各設問で評価の高い反応から4, 3, 2, 1点と得点化した。

子どもの精神的健康度に関する調査内容：保護者・幼稚園教諭・小学校教諭を対象とし、質問紙調査を行った。調査内容は、子どもの問題行動に関する内容（SDQ：the Strengths and Difficulties Questionnaire, Goodman,1997,Sugawara,Sakai,Sugiura, Matsumoto,2006）の日本語版25項目であった。SDQは、情緒的不安定さ・多動・不注意・仲間関係の持てなさの4側面について測定する構造になっている。回答方法は、“あてはまる”“まああてはまる”“あてはまらない”の3件法を用いた。

現段階のまとめと今後の方針

幼稚園教諭により評定された子どもの問題行動（情緒的不安定さ・多動・不注意・仲間関係の持てなさ）の得点によって、問題傾向が低い群・中程度の群・高い群の3群に分類した。分類の基準は、日本におけるSDQ（保護者評価）の標準値（4-12歳、2899名のデータ）から得られた得点に従って分類している。3群に属する子どもたちの自己有能感・社会的受容感得点を比較（一元配置分散分析）したところ、社会的有能感において、問題行動高群の得点が、問題行動低群の得点よりも有意に低いことが認められた（ $F(2,84)=3.5, p<.05$ ）。この結果から、幼稚園教諭が子どもたちの保育に困難を感じる場合、子どもたち自身も社会的受容感（お友だちから受け入れられていると思うかどうか）が低くなっていることが認められており、幼児期における子どもの問題行動への早期介入は、子どもの社会的受容感の改善にも役立つことが示唆されたものと考えられる。

表1 子どもの自己有能感と社会的受容感得点比較 (SDQ 得点群)

幼稚園教諭評定	子ども自身の評定	
	自己有能感	社会的受容感
高群	3.34(.44)	2.87(.45)a
中群	3.74(.39)	3.35(.31)b
低群	3.58(.41)	3.29(.55)c

a<c (F(2,84)=3.5, p<.05)

数値は平均値(SD)

本尺度は子どもに対する気づきを促す際に有効なツールであることから、子どものちょっとしたつまづきや問題行動の早期発見・早期介入への活用が期待される。今後は、児童期初期版のデータ集積を進め、尺度の作成に向けた分析(信頼性, 妥当性の検討, および因子構造の確認)を行い、精神的健康に関する尺度得点との関連性について詳細な分析を行う予定である。

引用文献

- Goodman R (1997) The Strengths and Difficulties Questionnaire: A Research Note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 38, 581-586.
- Harter, S. & Pike, R. (1984). The Pictorial Scale of Perceived Competence and Social Acceptance for Young Children. *Child Development*, 55, 1969-1982.
- Jambunathan, S. (2000). Gender Comparisons in the Perception of Self-Competence Among Four-Year-Old Children. *The Journal of Genetic Psychology*, 161(4), 469-477.
- Mantzicopoulos, P. (2006). Younger Children's Changing Self-Concepts: Boys and Girls From Preschool Through Second Grade. *The Journal of Genetic Psychology*, 167(3), 289-308.
- 桜井茂男・杉原一昭.(1985). 幼児の有能感と社会的受容感の測定. *教育心理学研究*, 33, 237-242.
- Sugawara, Sakai, Sugiura, Matsumoto, 2006 SDQ: The Strengths and Difficulties Questionnaire <http://www.sdqinfo.com/>